令和５年度高崎市総合教育会議　会議録

日　時　　令和５年１２月２１日（木）　午後２時００分から午後２時５７分まで
会　場　　庁議室
出席者
（市長）
富　岡　賢　治
（教育長）
小　林　良　江
（教育委員）

教育長職務代理者	神　宮　嘉　一	委　　員	田野内　明　美
委　　員	塩　野　有　希	委　　員	新　井　英　夫

（事務局）

教育部長	青　柳　正　典	学校教育担当部長	大　澤　好　則
教育総務課長	小　池　郁　生	教職員課長	岡　田　朝　夫
学校教育課長	依　田　哲　夫	健康教育課長	長　岡　　誠
教育センター所長	清　水　さとみ		
教育総務課長補佐	宮　澤　信　宏		

教　　育　　長	令和５年度高崎市総合教育会議を始めさせていただきます。 この総合教育会議は、滋賀県大津市の中学２年生がいじめで自殺をしたことについて、教育委員会が何も知らなかったという事実に対して様々な論議を受けて、地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正となり、総合教育会議を開くことになりました。また、会議を招集するのは、地方公共団体の長、高崎市では市長ということになります。市長と教育委員が自由に意見を交換する会議になりますので、今日は皆さんよろしくお願いします。 それでは、最初に富岡市長よりご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします。
市　　長	お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。先日の高崎市ＰＴＡ連合会研究大会で申し上げたことですが、２つ申し上げます。 １点目は、高崎市の学力は全国でも高く、東京と良い勝負です。今は正確には発表しないことにしていますので比較はできないのですが、高崎市は非常に高い位置にあります。しかし、もう少し進学率が上がっても良いと思います。１つは、先生方が頑張っているというのがあります。もう１つは、私が市長になって１年経ってのことですが、子どもは勉強でつまずくことがあります。それを個人レッスンなどでお金をかけてやれば何とかなりますが、そう簡単にいきません。そうしましたら、親が「勉強を手伝います」と言い出しましたので、放課後あるいは土日に保護者が中心になって「補習をしましょう」という方針を出しました。旧市内の駅に近いような学校では「教えても良い」というような親もいるでしょうが、「うちの地域には教えられる人がいません」と結構反発がありました。私は確信を持って「そんなことはありません」と話しました。地方の片田舎でも教えられる方は沢山いますし、先生よりも教えるのが上手いと思っている方は結構います。そういう人達にお手伝いしてもらいましょうと話しました。ＰＴＡの方々も協力してくださって、放課後や土日は保護者の方が学校に行って、子どもたちに補習をするということが定型化しました。これは大変有難いことです。前教育長は数学を重視しておりました。私は英語、数学は成績の良い子であっても必ずどこかでつまずくと思います。そういう時に補習をやって相談に乗ると、随分違うと思います。保護者やＰＴＡが中心になって子どもたちの学習を手伝っている市町村はいくつかありますが、年に１回か２回です。高崎市はそれを日常的にやろうという方針でお願いしましたら、よくやっていただいているなと思います。 ２点目は、虐待を受けて亡くなっていく不遇な子どもたちがいます。柏市の小学４年生の女の子が、父親の暴力を先生に訴えているのに何もしませんでした。そういうことを私は絶対に許しません。高崎市から虐待をゼロにしようと考え、「高崎の子どもは高崎で守る」ということで、児童相談所を設けようとしました。児童相談所というのは、みんな上手くいっているわけではありません。だいたい専門家は相談があると、分析したり、受容をしたりということから始める方が多いので、話を聞くということで終わります。形だけ相談しているうちに子どもが亡くなってしまうというところが多いです。そういう児童相談所ではなくて、行動する児童相談所を作りたいと思いました。児童相談所に虐待の通報が入り、専門家が行ってやり取りをしても親がドアを開けないというパターンがあります。多くの児童相談所はドアを開けずに「時間をかけて話しましょう」と言って帰ってしまうので、その間に子どもは亡くなってしまいます。ですから、私は児童相談所には無理やりドアをこじ開ける、これは法律的にできますので、そういう児童相談所にしようと行動する専門家を集めました。警察の協力を得まして、全国から募集しました。再来年の６月にオープンできると思います。高崎市から子どもの虐待をゼロにしようと準備を進めています。それから、同時にもう１つヤングケアラーについてです。ヤングケアラーというのは、だいたい中高生が学校か

	ら帰ってきて直ぐに寝たきりのご両親や祖父母のお世話をすることです。勉強や友達と遊んだりする時間は無く、世話ばかりしています。そういう子どもを救わないといけないというのが全国的なテーマになっています。貧困が絡むなど、それぞれの家庭が複雑ですから、どうしたらいいか全国で延々と議論をしています。まず調査をしますが、そういうのは調査をしなくてもすぐにわかります。大抵１校に１人か２人です。３人いれば３人対応すれば良い話で、私は子どもが困っている時に手助けしようと思いました。これは教育委員会に所管してもらっていますが、１００件くらいのケースがあり、そのうち実際にやっているのは３０件くらいです。１件１件、関係者が集まってワーキングチームを作り、それぞれに合った対応をしようということでやっています。高崎市がダントツでやっておりまして、そういう行動している市町村、都道府県はそうはありません。驚いたことに、ヤングケアラーは小学生もいます。小学校４～６年の子どもが学校から帰ってきて、鞄を置いて、直ぐ寝たきりのお母さんの世話をするというケースが多いようです。食事を作ったり介護をしたり、そういう子どもを支援します。「電子レンジで温めるのではない、温かいご飯を初めて食べた」と、子どもは涙を流して喜んでいます。そういう行動で、子どもたちを守っていこうと思っています。 　最後に、私は国や県の方針と少し違う考えを持っている事が１つあります。学校の部活動に対して非常に問題が指摘されまして、地域へ移行するということに必要以上にそうなってきました。なぜそうなってきたかというと、例えば、バトミントンを１度もやったことがない先生がバトミントン部の顧問をさせられていて、そして、土日まで出勤して大会や試合をさせられて、先生はもう嫌になります。そういうことが大変大きな不満になりますので、部活動を無理やり学校で取り込んでやっていくということはやめて、なるべく地域に移行しようということです。これは少し先走っていまして、どういう効果があるかというと、教育活動で大事な部活動、それを学校の先生が放棄する、そして、楽をしようということになります。学校の教育活動でもっとも大事なものの１つである部活動を、教育の現場が放棄するような方向になってきて、それは良くないと思います。その代わり、バトミントンを指導する先生がいなければ、地域で指導してくださる方にやってもらう。そういう地域協力なら良いのですが、「嫌なものは放り出しましょう」という実態になってきているので、これは良くありません。部活動という嫌なものは地域へと、働き方改革はさぼることではないので、ゆっくり、じっくりとやっていく、それが私の考えです。地域でできることから少しずつやっていく、そう思っていまして、一車線みたいになっているのが私は抵抗があります。国は「部活動は週１回休む」「土曜日は休み」とかそういうことを言っています。それは、学校が決めることであって、文部科学大臣や県の教育長が決めることではありません。それぞれの学校が決める方針です。それをあれこれ言うのはおかしいと私は思っています。高崎市の部活動は各学校が決めれば良いことです。何曜日に休むかとか休まないとか、それは学校の先生がやることです。教育の基本方針の中央教育行政法という法律がありまして、それは地方が決めることなので、国が決めることではないという、その方針で貫かせていただきます。部活動も、ゆっくり、冷静に、地域の状況を踏まえたいと思います。私がそういう考えでいることを頭に入れておいていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。
教　　育　　長	ありがとうございました。 　では、これから意見交換の場にしたいと思います。まずは、神宮教育長職務代理から、お願いいたします。
神宮教育長職務代理者	冒頭、市長からお話がありましたが、高崎市の学力に関して私も思うところを話していきたいと思います。高崎市は、学力の中でも特に英語に対しての取組が手厚い対策を色々取られているのかなと感じております。特に、小中学校で全校

	に必ず１人はＡＬＴを配置して、英語の授業だけでなく、やはり身近にＡＬＴがいることで、自然と英語が身近なものに感じているのかなと思います。子どもの成長を通しても感じるような時があります。幸いにして、全国学力テストなども高崎市は全国的にも優れた成績、英語は特に良いのかなと承知しているところです。ただ、これは少し教育委員会の範疇から外れてしまうかもしれませんが、その後、高校から大学に入るとか、そういった時の英語力で小中学校を一旦卒業というようなイメージがあります。それを何とかできないのかなと思います。学校訪問ということで、教育長と一緒に経大附属高校に行かせていただいたのですが、コロナも開けて今度はアメリカへの短期留学や観光で行かれるということで、プログラムから実施されるそうですが、素晴らしいことだと思います。昨今、円安の影響もありますし、全員が全員そういう機会を持てるわけではないので、そうした対策も色々していかないとかなと思いました。小中学校の英語のプログラムで色々とやられていると思いますが、イングリッシュサマースクールでのオンラインを通して、世界各国のＡＬＴと市内の中学生が英語でコミュニケーションを図る場面を見させていただきました。本当に臨場感がありました。素晴らしい技術の革新とともに、こういう取組ができるのだなと感じました。私もコロナの最中で海外に行けなかったので、オンライン英会話というのをやってみました。マンツーマンで画面上を通してですが、やる機会があると何とか言葉を覚えます。また、その国の文化や習慣だとか、言葉以外のものも学べました。市長がおっしゃられるように、英語を推進することで、良い意味での成長というのが見られるので、これからもますます英語教育を進めていってもらいたいと思います。
教　育　長	ありがとうございました。
市　　長	神宮さんの意見は貴重です。新しく教育長がお見えになったので、英語教育をもっと充実させる方法はあるか議論しました。色々とアイデアを出し合ったのですが、今、ネイティブスピーカーを各小中学校に配置しています。高崎市は８３校あり、経大附属高校を入れると８４校に必ず１人、英語のネイティブスピーカーを配置しています。ＪＥＴというプロジェクトでやっていますが、全校配置しているのは高崎市くらいです。大規模校では、ネイティブスピーカーがクラスに来るのは限られるので、複数化しようかと考えています。全校一斉に複数化するのは、英語圏のネイティブスピーカーの確保が難しいのと、財政的にも少しずつが良いと思います。とりあえず１０校くらい、８４人を９４人くらいにしようと思っています。ネイティブスピーカーと知り合うことで、英語を話す人と会っても腰が引けるということが無いようにしていこうと思います。もう１つ、２人で考えた案は、小中学生を留学させる方法はないかということです。募集してやろうと思いましたが、行く人は限られるでしょう。各校１人とか、生徒会長が行くという、そういう形式になってしまうのでは効果があまり見込めないので、ネイティブスピーカーを配置しようと思っています。英語教育の前進の１つの手段としてそれを考えています。倉渕に英語村を作りまして、地元の高崎市の子が半分くらいなのですが、英語を一言もしゃべれない子が１年経つと英語でスピーチをします。卒業式に英語でスピーチをすると親が驚きます。倉渕小でも、英語に関心を持ちますし、それから、倉渕地域のお年寄りなどが勉強する機会を設けようと頻繁に集まります。やれば進むのだなと思っています。また、私が市長になる前は、高崎経済大学で１年に留学する人は４、５人でした。留学費用を半分くらい市で援助しましたら、今は２５０人くらい行くようになりました。地方の高校生から見ると、高崎経済大学はみんな留学するように見えます。実際は１割と少しくらいです。みんな留学している大学だと思ってくれて、それでは行こうかとなります。もっと進めて広めていきたいと思います。

教　育　長	ありがとうございます。 では次に塩野委員お願いいたします。
塩　野　委　員	私も高崎市の英語教育についてお話させていただきたいと思います。先程、市長の話の中で、ＡＬＴを増員すると聞いて保護者として嬉しく思います。私の子どもは大規模校に通っているのですが、やはり時々しかＡＬＴに会わないようです。一方で、高崎市のＡＬＴが８４人ということで、かなり多いにもかかわらず、ＡＬＴのレベルがとても高いと感じております。教育長と一緒に小中学校を訪問した際に、至るところに英語の掲示物があるなど、ＡＬＴが普段から英語に触れられるような工夫をしているのだなと感じました。また、私事なのですけれども、娘が中学３年生で高円宮杯というスピーチコンテストに選ばれて全国大会に行ってきました。夏休み中からＡＬＴが１対１でずっと事細かに見てくれました。娘も良い経験をさせていただき、これがきっかけで英語が好きになって、英語に対して抵抗もなくなっています。英語をしゃべるということに積極的になって有難かったと思っています。今、英語教育というのは、話す力・聞く力、私達の時代は文法がメインでした。話す力・聞く力というのが、受験にも重点を置いてきているのでしょうけれど、ＡＬＴが小学校からいる高崎市は、他の自治体より進んでいて、小さな頃から英語に触れさせるということは本当にすごいなと思います。また、英語はどこかで必ずつまずく時がやってくる教科でもあり、その１番最初が中学校１年生なのかなと思います。３０人以上のクラスで１人の先生が一斉に教えようとした時に、ある程度英語に親しんできた子と、初めて本格的に英語に触れますという子の格差がすごく大きいと先生から聞きました。そこで、ＡＬＴがせっかく小学校にいらっしゃるので、大規模校にも人数を増やして充実させていただければ、その「中１の壁」というのがなるべく無いような、英語に更に親しむ機会を沢山作っていただけると思います。中学生になってくると、英会話だけでなく文法など書くことの勉強も入ってくるので、そこのつまずきとか、そこの格差をなくすということに関しては、地域の方の力を借りた英語の補習をこれからどんどんやっていただけたらと思います。もう１つ、これも予算やマンパワーの問題があるとは思いますが、中学生の留学がコロナで無くなり、代わりにＡＬＴがイングリッシュフェスタやバスツアーなどやっているということで、その報告も聞かせていただきました。とても魅力的で楽しそうで、私自身も参加したいなと思いました。これが一部の子どもたちだけ、英語に興味があるからこそ申し込んで、更にそこで良い経験をしてどんどん好きになるということで、ここでも興味のある子と興味のない子の格差が生まれていきます。こういったものが数多く、色々な子が参加できるような、ＡＬＴを中心にしたイベントが増えれば、大変有難いなと思います。
市　　長	塩野委員に応援してもらえて良かったです。大規模校は中心校が多いから、「なぜ中心校ばかりなのか」という方も多いかと思います。そう言われましても一度にはやれません。格差とおっしゃいましたが、どんなことをやっても格差はあります。子どもの能力に明らかに差がありますから。難しいことは難しいですが、指導する先生もプロです。その辺のことは上手くやっていただきたいと思います。英語というのは言語だから、学歴のない方も話せますし、機会さえ増やせば一部の方が参加するわけではなく、参加者は多い方が良いです。そんなに予算はかかりませんので、そういう企画があればどんどん応援します。教育委員会が主催するには限りがあるから、地域でやってもらわないといけません。学校の先生方がやるとまた忙しいと言います。どうして忙しいかというと、事務処理だと言います。昔調べたことがあって、発表はしていませんが、１番何が忙しかったかというと研修でした。まず学校で研修会をやり、都道府県や国でもやります。学校の先生の会合は長いので、学校も県も工夫したほうがいいです。例えば、運動会な

	ども見直したら良いと思います。教育で手抜きが起きると私は思います。１番心配しているのは、生徒指導がなくなってしまうことです。例えば、不登校の子どもが出た時に、昔だったら家庭訪問をして、ご両親に頑張って出てきてもらうように言うなど慌てて行いましたが、今はそんなにやらなくなってきました。不登校はそんなに悪いことではないと、その方針を文部省に出したのは私です。不登校が悪いことではなく、子どもが発達して飛び上がる時の助走だと思えば良いのです。それから、無理して行かせなくても、むしろ発達段階の途中のワンステップ、ツーステップするための助走部分にいるのだと、方針を出した時に私は言いました。そうしましたら、学校現場で不登校の子を無理に説得しようということがなくなってしまいました。これでは不登校が増えるに決まっています。そういう生徒指導も嫌なものです。非行に走ったりする子どもを追いかけて、ずっと努力していくでしょう。そういう仕事が沢山増えてしまいます。そういうことをなるべく避けるため、働き方改革とかでやらなくなってきます。そうすると、子どもを救うチャンスがあったのに救えなくなってしまいます。英語教育について、チャンスを少しでも増やすためには、ネイティブスピーカーを増やしていきたいと思います。自治体国際化協会に、高崎で１０人くらい増やすと面倒見てくれるかと。外国では、学部を卒業して大学院に行くまで、海外に行って少し働くことがあります。そういう人達がいるから何とかもっています。それが終わった後、群馬から自分の国に帰らないで、群馬で仕事をするようになります。結構そういう人がいて、貴重な人材だと思います。どんどん増やしていきたいと思います。
塩　野　委　員	よろしくお願いいたします。
教　　育　　長	ありがとうございました。 では次に、田野内委員お願いいたします。
田 野 内 委 員	私からは、先程市長のご挨拶にもありました、ヤングケアラーについてです。昨年９月から始まった新事業が１年経ちまして、全国に先駆けてサポーターの派遣がとても早かったと思います。市長とのラジオ番組を通して、ヤングケアラーへのお考え、思い、社会問題になっているのをどう取り組んでいくかというお話を伺ったことがありました。何が大事かというと、行動すること、すぐに実行すること、この速さが大事だということを伺いました。そのお話を伺ってから１年も経たずにサポーターの派遣ということで、とても速かったなという印象を受けています。取組状況ですとか、実績なども見させていただいた中で、市役所の各課と学校との連携がとても良くなされていて、それが迅速な対応に繋がっていると感じています。中にはとても難しいケースもあるようで、ヤングケアラーの子どもだとわかっても、支援を拒んでしまう。第三者を家庭に入れることに抵抗がある保護者もいらっしゃるようです。だからといってそのままではなく、時間をかけて説明をする。皆さんが尽力しているなと感じました。そういった粘り強く対応した結果が、子どもの支援に繋がっているのだと思います。また、利用しているお子さんの声やサポーターの声に思うところがあります。お子さんは「自分の時間ができた」「友達と遊べる」「宿題ができる」だとか、食事の面では、「温かいものが食べられるようになった」「炊き立てのご飯を食べられるようになった」と話をしてくれました。また、サポーターのご意見ですけれども、子どもたちが徐々に今日あった学校のことを話してくれるようになって良かったと言っていました。生活の支援が主だと思うのですが、サポーター達がそういうことをしてくれることで、子どもの心を救ってくれる事業なのかなと思っています。先程も小学生が多かったという中で、現在、「１日２時間、週２日」が上限になっているかと思うのですが、小学生だとやってもらいたいこととか、もっと支援してあげたいところとか、年齢が若いほどあるのではないかと思うのですが、もし、

	現場でもっとこういう支援が必要だという意見などがありましたら、それに対しても、更なる対応と対策をお願いしたいと思っています。私もメディアの人間なので、こういうサポートがあることを皆さんにお伝えしたいと思います。
市　　長	予算の関係もありますが、「週２回、最高２時間」は少ないと思っています。もう少し様子をみて、お手伝いする時間を増やしても良いかなと思います。貧困家庭だとか、精神的に破綻しているご家庭の中のお子さんだとか、色々な手法を使って対応します。教育委員会と福祉の連携というのは言葉では良いのですが、連携というのは１番難しいです。どこの組織でも横の連携というのは上手くいきませんが、その割にはよくやってくださっています。ヤングケアラーになった原因を解決するというのは並大抵ではないので、解きほぐすのが大変だと思います。とにかく、今救ってあげることが大事です。役所が仕事を引っ張る方法は２種類あって、まず検討会議を設けること、そして調査をすること。これで実行までに３年は引っ張れます。今、全国のヤングケアラーの問題はそれです。難しいから引っ張っているだけです。高崎市は進んでいるので視察に来ます。やらない理由の１つは、謝礼の経費を確保できないこと。もう１つは、お手伝いをしてくれるボランティアのリストを持っていないことです。高崎市はこの２つがあるので実行できました。１件１件全部状況が違います。児童福祉法で、虐待に遭う子どもを隣の家の人が知ったら通告する義務が国民にはあります。しかし、密告するのが嫌なのでみんなしません。それは、通告する義務があることを何となくそうだなと思うのに何十年かかったことでしょう。子どもが虐待されているのを電話するのは腰が引けますが、隣の家の悪い事を通告すべきです。児童福祉法ができて３０年くらいでしょうか、今頃言い出しました。密告するのは嫌なものですが、それを乗り越えていかなければなりません。波風が立ってもひたすらやっていこうと思います。
教　育　長	ありがとうございました。 では、新井委員、よろしくお願いします。
新　井　委　員	私もヤングケアラーＳＯＳの取組についてお話しさせていただきます。市長が先程おっしゃいましたように、他の都市ではヤングケアラーについて、調査をしたり、条例を作ったり色々やっている中、高崎市は令和４年度より、全国の自治体で初めてヘルパーを無料派遣することになったということで、本当に先進的な事業で驚きました。本当に素晴らしい取組であると思います。小学生も含めて中高生が、自分のやりたいことを我慢して、勉強する時間もなく、家事、介護、きょうだいの世話に追われて、心身ともに疲れ果ててしまって、将来の希望も見えない中で過ごすという状況は、本当に見過ごせないことであると思います。そこにいち早く注目して、政策を実行した事に心から賛同いたします。高齢者の増加、母子家庭や共働きの増加など、社会構造が変化して、その家族に起きた問題が子どもや若者にしわ寄せがいって、その家族の中では解決することができないという状況です。社会で支えていくということが、本当に必要であるとしみじみ感じました。この対策を実現するためには、本当に様々な分野の連携が必要で、その協力体制の構築に本当に努力していることが感じられました。この取組のポイントの１つとしては、ヤングケアラーをいかに発見するかという、様々なメディアを通して周知を行い、職員の方々が事業所や学校に積極的に周知活動を行う努力をされていると感じました。私たち医療機関でも何かできることがあるかなと思っており、例えば、９～１２歳の間に日本脳炎の予防接種などをきちんと受けていない方がいます。そういう方については、ヤングケアラーという視点からも注目した方がいいのかなと思いました。もう１つのポイントは、サポートが受け入れられないという状況があると伺ったのですが、高崎市は複数の機関の連携、粘

	り強いサポートで支援に繋がったということは本当に素晴らしいと感じました。今後、自分も何ができるか考えながら携わっていけたらと思います。
教　育　長	ありがとうございました。
市　長	お医者さんは様子がおかしいとかわかるのですね。医療との連携は大きなテーマです。「子どもの状況を見てみんなで考えていきましょう」と言いますが、みんなで考えることはなく、特定の人が考えればいいと思っています。組織的に学校の先生からの通告が多く、思ったよりも学校の先生はよくやってくれています。ヤングケアラーの状態になっていることは、自分のクラスを見ていれば先生は把握しているはずです。しかし、きちんと言ってくれるかは心もとないですが、先生からの通告はかなり多いです。教育現場でのいじめの話で言いますと、いじめで何か起こると、学校の先生の「気がつかなかった」「いじめられていると思わなかった」という答えがありますが、本当のことは言っていません。「加害者の親が全然話を聞いてくれなかった」「あの家庭は大変だ」とか言えないものだから、「知らなかった」と答えます。実際知らないはずはありません。相手のプライバシーを悪く言ったらいけないので、マスコミには本当のことを言えず間の抜けた答えになっています。先生もかわいそうです。ヤングケアラーになったことについては、学校現場に責任は無いので言えるのだと思います。思ったよりも先生からの通告が多かったのは有難いことです。そんな通告があったことを今まで放っておいて、何もしなかったということですけれども、今度は先生方が都合してくれれば、皆でワーキングチームを作ってどうしたらいいか、担任の先生の意見を聞くなどしてやります。知恵を出して、「どうしたらいいか」と聞いていかないとです。いきなり乗り込んでいくというのはありえません。乗り込んでもドアは開けてくれませんから。しかし、気が利いた人や親切な人は居るので、そういう人の話を聞いて、最後はなだめていきます。例えば、介護などは、知らない人に身体を触られるのは嫌だから、喜んでお風呂に入ることはないですが、慣れてくると信頼してくれます。トライしてぶつかっていけば、門は開くと私は思っています。調査をしていますと、３～５年はかかります。高崎市は行動する街にしたいと思っています。児童相談所も１つのポストで何十人も応募が来ます。専門家の方は、論文を書くのは上手ですが、行動するのは得意ではありません。「夜中にドアを叩いていけますか」と面接で聞くと、「行けます」と言います。「本当に行けますか」と聞くとだんだん腰が引けていきます。ですから行動する警察官のＯＢなどを採用します。事務局も市の職員の中で、福祉関係でとても苦労をして色々な人と会っている職員を配置します。児童相談所は、同じ敷地の中に相談所と親から切り離して子どもを避難させている宿泊施設を併設します。突然親が金属バット等を持って殴りこんでくるとも限らないので、そういう時に対応するにはどうしたらいいのか準備をしています。事故が起きないように考えています。また、施設は問屋町の駅を降りた１番良い場所です。暗い建物ではなくて、明るい建物にしようと設計も終わりまして、工事に入るところです。公明正大、正々堂々とやっていきます。
教　育　長	ありがとうございました。 本日は、市長と教育委員の意見交換の場で、市長の思い、皆様の思いもお互いに言い合えたのではないかと思います。大変有意義なものになったと有難く思います。 以上で、令和５年度高崎市総合教育会議を閉会させていただきます。ありがとうございました。